

「ガラスの壁」

政治経済学部 1 年 原康熙

① アジテーション (300~400 字)

みなさん、自由とは、一体何でしょうか？ 何かを強制されないことでしょうか？ それとも単にやりたい放題やることでしょうか？ ハイエクは、自由という言葉を表すのに”freedom”や”liberty”ではなく、敢えて”tolerance”（寛容）という表現を用いました。ではなぜ彼は、このように言ったのか？ それは彼が自由という言葉の意味を、人と人との相互関係として捉えていたからではないでしょうか？ 自由とは外から与えられたり、自ら一方的に主張したりするものではなく、人と人が互いに尊重し合い、認め合う中で見いだされるものであると考えていたからではないでしょうか？

しかし、現在の社会を見てみるとどうでしょう？ 例えば、日中でサッカーの試合をすることはあります。最近ではこういう時、ほぼ必ずと言っていいほど掲示板サイト「2ちゃんねる」で試合と同時進行でスレッドが展開していく、いわゆる“実況中継”が行われます。そしてこの中では、いつも試合とは関係のない相手国の誹謗中傷が書き込まれることがよくあります。3年前の試合では、日本の主力選手が参戦しなかったことと中国の大気汚染と関連させて「これこそ真の罰ゲーム」「南無阿弥陀仏」などとスポーツマンシップに反するような言葉が書き込まれ、その内容が逐一中国語に翻訳されて、中国の大手ポータルサイトで配信されていたというのです。これらは「表現の自由」の名の下に、制限され得ないものです。そこに果たして寛容さは存在するのでしょうか？

② 理念、問題意識 (300~400 字)

これは、日本に寛容さが欠けているという一つの例です。しかし、これは重大な問題であると捉えるべきではないでしょうか？ 夏季オリンピックについて考えてみると、少し前にリオでの大会が終わり、次へのバトンが東京に引き継がれました。この世界の平和祭典を開催する国としていかなるものなのでしょうか？ そうでなくとも、一級国家として、そして、世界から尊敬される開かれた魅力ある国としていかなるものなのでしょうか？ だからこそ、私は、今日ここに、日本人の外国人に対する 排外意識の改善を訴えるのです！

③ 現状分析 (400~500 字)

ではここで、現在の日本と日本で生活する外国人を取り巻く状況を少し詳しく見ていきたいと思えます。法務省の統計によると、2015年時点で外国人登録者数は約 223 万人となり、20 年間でほぼ 2 倍に増加しています。新宿区など一部自治体では、毎年 6~7%の増加を続け、今後ますます私たちが外国人と関わる機会が増えることが予想

されます。さらに、国籍別の構成比をみると、1990年の入管法の改正後に増加したいわゆる南米日系人に加え、中国人等のアジア系の外国人が大きく増加し、国籍の多様化が進んでいます。1990年代後半はその約半数が朝鮮・韓国人でしたが、2015年の統計では中国人が約71万人と最も多く、次いで韓国・朝鮮人、フィリピン人、ブラジル人の順となっています。こうして日本国内でも外国人の増加と多様化が続いている今、外国人をグローバル市民の一員として認識し、切磋琢磨していく時代となっています。例えば、現在、日本では、日本で共に働くパートナーとして高度人材を積極的に受け容れています。この高度人材という面に着目してみると、日本では2000年代後半以来増加を続けています。一方、経済産業省の統計によると、主要先進国における高度人材の外国人の比率は、日本はわずかに1.1%。カナダ7.2%、アメリカ6.0%などと比べて、低水準です。これについては、やはり日本人の差別意識に代表される寛容さの欠如が原因であると考えられます。実際、鳥取県など一部自治体の調査では就労差別を理由に将来の就職に不安を抱える留学生は8割を超えました。

④ 原因分析 (800～900字)

それではなぜ、日本人は外国人に対しに寛容になれないのでしょうか？ 逆に、どうしたら日本で生活する外国人は日本人を寛容であると感じられるのでしょうか？ この問いには二通りのアプローチがあるでしょう。一つは制度的アプローチ、もう一つは社会心理学的アプローチです。制度的アプローチとは、役所・役場で多言語サービスを提供したり、外国人住民向けの安価な語学講習会を開催したりするなどして外国人の生活を支援することです。しかし、制度ぐらいで人の心は変わらないのです。人の心の寛容さという問題を扱っている以上、人の心に直接働きかける手段が必要です。

実際、2005年に総務省が策定した「地域における多文化共生推進プラン」をモデルとして全国の自治体が外国人政策を実施しており、外国人の生活支援がその軸となっていますが、外国人への差別の実態はあまり改善していません。このプランを中心的に行っている京都市では、プランの導入前後で外国住民が差別を受けた経験に関するアンケート調査を行いました。その中で、差別を受けていると感じている外国人の割合が9割であったのが、約8割に軽減しましたが、これで十分だとはいいがたいでしょう。

そこで、二つ目のアプローチとしてあげた、社会心理学的アプローチが有効であると考えられます。

そこでまず、ヨーロッパ社会心理学会の設立者であるヘンリ=タジフェルの研究に、人がいかに他人を認識するかを分析したものがあります。人の個性は無数の側面によって特徴づけられます。しかし、そのあらゆる特徴をあらゆる側面から認知することはとても大変です。ならば、それら进行处理するためには、ある程度、型にはめて、あ

る属性の人はこういう人だろうと判断する他ありません。そして、その属性というのが「外国人」という自分と「違い」をもつものであったならばどうでしょう？ 人間とは自らを肯定的に捉えたいが故に、他人を否定的に捉えてしまう生き物です。この時、自分は肯定的に、相手は否定的に、という思考が繰り返され、「違い」が極大化され、拒絶してしまうのです。

では、次に、いかにして「違い」が拒絶されてしまうような事態を避けられるか見ていきたいと思います。これについては、次のような実験があります。参加者がグループ A とグループ B に分かれて課題に取り組んだケース 1 と、参加者が一つのグループ C として課題に取り組んだケース 2 を比較します。その結果、ケース 1 ではグループ A とグループ B の関係は悪化しましたが、ケース 2 ではグループ C 内の参加者の関係は極めて良好なものになったというのです。

この実験の結果をもとに、クック、ブラウン、山内隆久など多くの心理学者が効果的に差別感情を改善する条件を分析しました。その結果、すべての分析に共通していた条件は互いを肯定できる経験をすることでした。また同時に、安易な交流は自身の差別意識の正統性を確かめるためだけに使われるためよくないと結論付けました。

⑤ 政策（1100～1200 字）

そこで、私は 1 点の政策を提案します。アコルドリーの導入です。

アコルドリーとは、社会的に不利な立場にある方たちへの支援と地域社会での共生をめざして始まった、住民同士ができることを無償で提供し合うという、相互支援サービスです。日曜大工やガーデニングのお手伝い、スポーツや外国語、絵画を教える、写真撮影の指導、掃除、料理、ベビーシッターなどなど、できることなら何でも構いません。会員の登録料や会費はゼロで、運営側は連絡先と提案しているサービス内容を会員に対して公開します。また、サービスのやり取りの際は、お金ではなく、サービスにかかった時間をその代わりとします。つまり、1 時間のサービスを提供したら、自分も 1 時間のサービスを受ける権利をもらえることになります。たとえば、壁の塗り替えをお願いして、3 時間かかった場合、壁を塗ってくれた方に氏名と「3 時間」と明記した“小切手”を渡します。そして、その小切手を次に自分が何かを依頼するときを使う、といった具合です。アコルドリーの目的は、住民同士の直接的関係を築き、交流を促すことです。実際、アコルドリーはサービスを“提供する—受ける”という関係以上に、そこから生まれる、“頼り頼られる”という互いを肯定し、肯定される経験を得られる関係が高く評価され、会員を増やし続けています。この点で、私たちが一般的に聞くものとは異なり、自治体や何やらから提供する安易な交流には陥りません。それに対し、アコルドリーでは単なる交流の機会の提供を超え、交流を通じた互いを肯定できる経験が期待されます。

このシステムを職場や教育の現場など、比較的小さなコミュニティに対して導入します。そうすることで身近にいる外国人と継続的関係を築くことができ、長期的な排外意識の改善が期待されます。また、そのうえで免税を行ったり、補助金を給付したりするなどして、この政策が社会で広く実施されるように促します。

⑥ 締め（100字）

現在の日本に於ける日本人と外国人の関係は、謂わば「ガラスの壁」を隔てたような関係です。その壁を、どれほど磨いて互いの姿を確認しようとも、結局、互いが触れ合うことは許されません。制度を変え、生活を支援し、どれほど形式的に対等な立場を認めようとも、一人ひとりの心の中にある排外意識が改善されず、寛容な心を持つてなければ、結局何も解決しないのです。

だからこそ、今こそこの「ガラスの壁」うち破り、日本人に寛容さを取り戻そうではありませんか！ 真の一級国家たるために、世界から尊敬される魅力ある国であるために……！

ご清聴ありがとうございました。